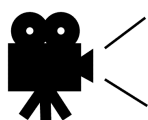




2013 年
会報 夏号
No.39

目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。



ごあいさつ

シティ・ライツ代表 平塚千穂子

暑中お見舞い申し上げます。日増しに暑くなってきましたが、会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか？さて、6月30日の第6回City Lights映画祭が無事に終わりました。皆様には、多大なるご支援・ご協力をいただき、ありがとうございました。おかげ様で、当日はお天気にも恵まれ、延べ約700人の方々に、ご来場いただき、盛況のうちに幕を閉じることができました。本当にありがとうございました。

毎度のことなのですが、映画祭は長い長い準備期間を経てきたのに、本番はあまりにもあっという間に、夢のごとく終わってしまうので、しばらくは、夢うつな状態です。タイムトラベルから帰ってきて、なかなか現実に戻れない、時差ボケ状態？そんな感じです。。

今年は、実行委員の人数がいつもより多くて、しかも個性豊かで多彩！これまでの反省も踏まえて、それぞれ係を決め、班長を決めて、最初から分担制で事を進めていったので、いつもより実行委員一人一人のパフォーマンスが活かされた分、負担や責任も大きくて、大変だったのではないかと思います。

でも、みんな、はじめて行う作業に戸惑いながらも、一生懸命でした。慣れないことでしたし、月1回のミーティングでは、意志の疎通もままならず、紆余曲折や、ひと波乱もありました。でも、振り返ってみると、いつもより、エネルギーで、面白い実行委員会だったなと、感動すら覚えます。(禍中にいた時は大変だったと思うけど。。)

何ごとも、事を荒立てずに、うまくやろうとすることだってできるけれど、真っ正直に生きてるからこそ、怒ったり、ぶつかったりするのが当たり前で、その当たり前が許されている場所って、なかなかないのではないかと思います。ぶつかって終わりじゃなくて、さらに高みに向かうと、より良い応えが引き出せる。それって、すごいことなんじゃないかな…と、思いました。

そんなことを思うと、何が起ころうとも、みんなの気持ちをふんわりまとめてくれるノンちゃん委員長は、さすが！で。ご本人は体調不良を気にして、申し訳ない。なんて言っていました。ノンちゃん委員長あつての映画祭なんだなと、改めて感じました。

そして、なんと言っても、今年の映画祭の立役者は、ナガタカオルさんでした！「映画祭物語」の執筆だけでなく、裏では、一番もめる作品選定に身を投じ、パンフレット制作の志気を高め、「どら平太」のガイド作りにも精を出す。あらゆる局面で、この映画祭を、心をこめたイベントにしようと、誰よりも一生懸命に、骨を折ってくれました。本当にありがとうございました！

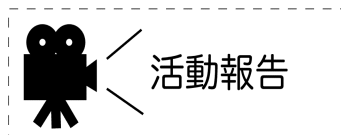
今年、実行委員に初めた参加したメンバーも、それぞれ大活躍してくれました。ずっと続けてきた東北ボランティアの経験から、募金先の紹介と、募金集めに心をこめて力を尽くしてくれた飯嶋くらさん。いつもみんなのことを気にかけて、何かあればさがりえなくフォローしてくれた、はるみさん。その優しさは「明日への一步」のコメント集めにも、活かされていましたね。それから、「遠い空の向こうに」の字幕朗読台本づくりやキャスティングに協力してくれた、宮下さんと東王地さん。それぞれお仕事やご家庭での苦しい事情を抱えながらも、とてもがんばってくれました。福田さんは、みんなの意見が煮詰まった時に、率直な意見をぶつけてくれて、委員会をより刺激的に面白くしてくれた一人でした。林さんも忙しい中、協賛営業や宣伝活動に協力くださって、ありがとうございました。武藤さんも、あれこれお忙しい最中「遠い空の向こうに」の監修や、土壇場の追い込み作業を手伝ってくれました。あと、なんと言っても、「遠い空の向こうに」を推薦してくれた平井さん。金沢への転勤が決まって、映画祭本番には立ち会えませんでした。会場の大感動、伝わりましたよね！すごかったですよ。本当に、ありがとうございました。他にも、栗原さん、もえちゃん、たかこちゃん、テツちゃん、大坪さん、ドビーちゃん、モグタンと。映画祭実行委員として、おなじみのメンバーたちも持ち前の個性とスキルを発揮してくれました。実行委員の皆さん、本当にお疲れ様でした。

実行委員以外にも、字幕朗読の演出や、当日のショートフィルムのライブガイドをしてくれたダンさん。総合司会のめーたん&大輔さん。チラシ・ポスター・パンフレットのステキなイラストをデザインしてくれた栄元太郎さん。「どら平太」と「遠い空の向こうに」のガイド勉強会に参加して、ガイドづくりを分担してくれた皆さん。声優ボランティアにご協力いただいた皆さん。総勢109人の当日ボランティアスタッフ。そし

て、手話サポートにご協力いただいた、世田谷福祉専門学校の飯泉先生と生徒さんたち。トークショーゲストにお越しいただいた「福島こどものみらい映画祭」の久我委員長。そして、当日ご来場いただいた皆さん、本当にありがとうございました。

今年は、体調を悪くされていた方も多かったですし、本業のお仕事が忙しくて、時間をとることがままならないという方も多かったのですが、映画祭を創っていくのは、いつも以上に大変だったと思うのですが、すべてが必然的に関わりあって、その一つ一つのパズルのピースが、映画祭という一つの大きな絵に、結実しているの事を思うと、本当にこれは「奇跡」ですね。

おかげ様で、「福島こどものみらい映画祭」には、159,589円もの募金が集まりました。皆さんが集めてくださったエネルギーが、「福島こどものみらい映画祭」で創り出される「奇跡」にもつながっていきます。こうして、わたしたちが、どんな難局も乗り越えて、明るい未来を描いていけることを、日々の生活の中でも、実証し続けていけたら、素晴らしいですね。みんなで踏み出した明日への一歩。一歩、一歩、ゆっくりと、歩み続けていきましょう！



このコーナーでは、近日(4～6月まで)に開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- 4/6 『だいじょうぶ3組』 ムービックスさいたま
- 4/13 『ひまわりと子犬の7日間』 ユナイテッドシネマ としまえん
- 4/14 『シュガーラッシュ(2D吹替版)』 ユナイテッドシネマ としまえん
- 5/4 『名探偵コナン 絶海の探偵(プライベート・アイ)』 ユナイテッドシネマ 浦和
- 5/6 『舟を編む』 丸の内ピカデリー
- 5/7 『宇宙兄弟』 TKPシアター 柏
- 5/11 『インナーヴィジョン(本編45分)』 渋谷アップリンク
- 5/18 『図書館戦争』 川崎チネチッタ
- 5/20 『海と大陸』 岩波ホール
- 5/26 『シェルブールの雨傘』 川崎チネチッタ
- 5/26 【プロレス観戦】ゲノム26 音声ガイド付きプロレス観戦 東京ドームシティホール
- 6/8 『県庁おもてなし課』 ユナイテッドシネマ としまえん
- 6/15 『くちづけ』 丸の内TOEI
- 6/22 『華麗なるギャツビー 3D吹替版』 川崎チネチッタ
- 6/29 『奇跡のリンゴ』 川崎チネチッタ
- 6/30 【映画祭】第6回シティライツ映画祭『どら平太』『遠い空の向こうに』 両国・江戸東京博物館大ホール



第6回

City Lights 映画祭 ▶▶▶▶

▶▶▶ レポート!!!

毎年恒例のCity Lights映画祭のレポートです。今回は、初めて音声ガイドづくりにかかわった方々に頂いた原稿をご紹介します。後半は、今年の映画祭の募金先「福島こどものみらい映画祭」について、短いトークショーではお伝えしきれなかったことも含めて、実行委員長の久我和巳さんへの質問と、お答えいただいた内容をご紹介します。皆様のおかげで、募金も159,589円集まりました。11月に開催される本祭では、バリアフリー上映にもご協力したいと思っています。これからも引き続き、応援よろしくお願いします！

初めての音声ガイドづくりに参加して

(伊藤 綾)

私は前職は雑誌のレイアウトデザインの仕事をしていたのですが、東北関東大震災の体験から(出身が福島県です)、人と関わる仕事やボランティア等に非常に興味を持つようになりました。今回転職活動で平日にゆとりが持てたのを機会に自分も楽しみながらできるボランティアはないだろうかと探していました。学生時代から映画は大好きでしたので、ネットでシティライツのホームページを見つけた時「これだ!」と震えたのを今でも覚えています。

今回「どら平太」という作品で初めてガイドづくりを体験させてもらいましたが、見慣れていない時代劇ということもあり、言い表せない単語が続出で、メンバーの方の知識の豊富さに驚くと共に、言葉を知るたびに新しい世界がひろがるような体験をすることができました。そして、みなさんの語彙の多さはもちろん、言葉のニュアンスへのこだわりや情景の雰囲気やを少しでも正確に伝えたいという熱意に毎回新鮮な驚きがありました。

また、モニターさんとのふれあいを通して感じた事は、『感受性や想像力、察する力や表現力が晴眼者の私より、なんて豊かなだろう!』ということです。障がいを持った方はハンデがあるから助けてあげなければ...という傲慢な考えはまったく間違いでした。お話するたびに自分がどんなに既成概念や余計な情報にとらわれて素直に感じる気持ちやをなくしているか、言葉で伝えることを怠けていないかと考えさせられる事が多かったです。

さて、作品自体は破天荒なら平太が、その器の大きさで人の懐にずっと入っていき、壕外の悪を治めていく痛快な作品になっています! 映画祭で自分で考えた音声ガイドが入った作品を鑑賞できる事に、今からワクワクと心待ちにしています。

ありがたいことに、勉強会終了時に次の働き口がみつかりましたので、これからも自分のペースでシティライツに関わっていきたいと思います。大切な自分の居場所が一つ増えた思いです。

音声ガイドづくりに参加してみて

(まおっち)

みなさん、こんにちは。今回初めて音声ガイドづくりに参加した舩井(ますい)と申します。名字も名前も難しいので、あだ名のまおっちで呼んでいただければと思います。これから、シティライツと出会ったなれ初めと、音声ガイドづくりの感想と、今後の抱負について書いていきますので、あまりびっくりせずにお気楽に聞いてください。

私は去年の秋、会社の上司からハラスメントをされていました。困って会社に相談したところ、調査をするので自宅待機をされているよう言われました。その待機期間が長くて、1月居ぬ・2月逃げる・3月去る、で4月になりました。私はもう会社への復帰をあきらめて、翻訳学校に通って就活をし直すことにしました。そして練習のために翻訳のボランティアをしようと思い、ボランティア掲示板を探していて見つけたのがシティライツでした。私の父はチャップリンが大大大好きで、家に小作品から長編のビデオがあって小さい頃からよく観ていたもので、懐かしい名前に惹かれてボランティアMLに申し込みをしました。

活動についてよく調べてみると、映画の誘導の人手が足りないと思ったので、誘導ボランティアの方に活動の方向を切り替えて、4月にあった「シュガーラッシュ」の鑑賞会に申し込んでみました。映画は大好きですが、いつも一人で観ていて寂しかったので、音声ガイドも食事もしました。そして初めて音声ガイドを聞いたとき、「これはすごい!」と思いました。ダンさんのやさしくユーモラスな語りによって、映画が何倍も面白く感じました。これは晴眼者が聞いても面白いのでは? もっとみんなに聞いてもらいたい! と思いました。食事をしながら大勢で感想を言い合うのも、初めてで楽しかったです。私の新米誘導につきあってくれた水越さんから、映画祭向けの音声ガイドづくりの人手が足りてないとか、締め切りがとくに過ぎていたのに強引に申し込んでみました。

音声ガイドづくりに参加してみて感じたのは、日本語って難しいな~というのもそうなのですが、人の心の優しさとか、映画祭を良いものにしようという皆さんの熱い想いとか、好きな事を何でも言い合える間柄とか、世の中にこんなに優秀ですごい人が大勢いたのねという驚きとか、一言では言い表せない暖かい気持ちでした。私は参加しているだけで、すぐ満たされた気持ちになりました。

平塚リーダーがまたほめ上手で、都度で褒めてくれるので、自信をなくしていた私も元気になってきました。書き起こしのお手伝いもして、自分の知らない自分のスキルに気づいてちょっぴり強くなってきました。5月にやっと会社の調査の結論が確定して、上司はおとがめなしで私の方に問題があったとされてしまいました。いままで待機していた半年分が欠勤扱いになってしまいました。私は泣きませんでした。私の事を認めてくれるシティライツの仲間がいっぱいたからです。

5月末から元の職場に戻れる事になり、半年ぶりで会社に行きました。胸の中は新しい計画をどう実行しようか考えていたのでわくわくしていました。私の勤める会社は川崎にあるので、組合のサービスボランティア部に掛け合って、川崎のチネチッタで上映会があるときに、誘導ボランティア募集の案内を回してもらおう事にしたのです。私のお願いは聞きいれられて、私もサービスボランティ

ア部の一員になりました。図らずも、一気に活動基盤と仲間ができてしまいました。今回、私に起きた事は残念な事ですが、私はパワーアップしたので、次があるとしても前よりもましになるんじゃないかという予感がします。

シティ・ライツは、「私も人として扱われたい、楽しみたい」という願いにさいた街の灯になってくれました。と、書いていてちょっと嬉しいので止めておきますね。

私はこれからも、シティ・ライツで新しい事に色々チャレンジしていきたいと思っています。この一か月半の活動で、いっぱい感謝されていろんな人から「ありがとう」を言われました。でも、本当は「ありがとう」を言いたいのは私の方です。今これを読んでくれる皆さま、シティ・ライツの活動を大切にずっと支えてきた皆さま、ひとりひとりに、私を助けてくれてありがとうと伝えて回りたいです。映画祭楽しみにしています。今後ともよろしくお願いいたします。

福島こどものみらい映画祭 久我和巳委員長のお話

Q: 福島こどものみらい映画祭は、どんな映画祭なのですか？

久我さん…福島こどものみらい映画祭は2009年、映画というフィルターを通して、みらいのこどもたちにどんな社会を作っていくか、どんな世の中を残していくか、大人もこどもも一緒になって考えようというコンセプトで出発しました。今を生きるこどもたち、かつてこどもだった大人たち、将来生まれてくるこどもたち、すべてが私たちの映画祭の対象です。主な活動は3つあります。

一つは、今日のこちらの映画祭のように、同じ空間を共有して、泣いたり笑ったりしながら映画を楽しみ、日常に映画を持ち帰っていただくイベントとしての映画祭です。

二つ目は、ふくしま映画塾。これはプロの映画人をお招きして、福島県民の皆さんと3日間で映画を作ってしまうという企画です。皆さんが寝食を忘れて作った映画は、もう30本近くたまりました。私たちの映画祭の貴重な財産です。

三つ目は、県内の映画環境に恵まれない地域を巡回する移動上映会です。映画館やホールでみんなで映画を見ることの楽しみを知っていただきたいという思いで始めました。東日本大震災の後では、避難地域への出張上映も行っています。

Q: 昨年の映画祭のプログラムの中に、「昭和の8ミリフィルム」という短編の上映がありますが、これはどんなプロジェクトですか？

久我さん…このプロジェクトは、2009年に始めました。8ミリフィルムは50年くらいの耐久性がありますが、それを過ぎると見えなくなってしまうことから、今のうちに、かつてのフクシマの風景を残しておきたいと思ったのがきっかけです。フィルムは850本が集まり、2000時間以上になりました。これを4、5人で半年以上かけて見ることから始めました。2000時間のものを、カンヌ映画祭に出品したいと考えて、15分のものに仕上げたのですが、残念ながら、カンヌ映画祭では、選考されませんでした。でも、イギリスのジャパンフェスタのオープニングで上映されましたよ！



Q: プロジェクトは震災前から始まっていましたが、震災にあわれて、活動の目的など、変化があったのでしょうか。

久我さん…変化はありました。「記録しておく」という目的だったのですが、震災のあとは、フクシマから世界にメッセージを送りたいと思うようになりました。時代が変わったというほかに、やはり、被災したことによって、今はなくなってしまった景色もたくさん映っています。ただ、震災の映像が世界に流れましたが、それだけがフクシマではない。日常の人々の営み、生活の場であることを伝えたいかったですね。

変わりゆくもの、消えて行くものがあるのと同じく、決して変わらないもの、変えてはならないものもあると思います。震災後、福島
の悲惨な映像が世界中に流されましたが、今も福島で私たちは笑顔を忘れず、変えてはならないものを信じて生きています。

Q: “こども映画学校”というプロジェクトもありますが、これはどのようなきっかけで始められたのですか？

久我さん…20年後を想像してみようじゃないか…という話を「映画塾」の塾長で、映画「一命」や「十三人の刺客」プロデューサーの
前田茂司さんたちと話したのがきっかけで始めたのが、こども映画学校「20年後プロジェクト、こんな大人になりたいっ！～20年後
のわたしへのラブソング」です。こどもたちには、あらかじめテーマを提示していました。

今の私たちは大きな悲しみ、計り知れない不安を抱えて暮らしているけれど、それだけじゃ、だめ。20年後の自分を想像してみてく
ださい、どんな職業についているか、どんな人と恋をしているか、どんな便利な秘密道具が発明されているか、そんなことを夢見る
ことが、今を生きて行く力になるんじゃないか、そんな風に考えました。

こども映画学校は、いわき市の豊間小学校にご協力をいただき、昨年7月、夏休みに入ったばかりの3日間で映画づくりをしました。
最初は参加してくれるこどもたちは20人くらいと聞いていたのですが、いざ募集をすると集まったのは1年生から6年生までの60
数名、これは豊間小学校の児童総数の半分を超える規模で、主催者としては、まさに嬉しい悲鳴でした。

そのこどもたちを5班に編成して、各班に監督や脚本家など2名ずつのプロを講師として配置しました。こども映画学校のスタート
は、各班ごとに分かれて、企画を練り、脚本を書くことからです。それぞれが、こんな大人になりたいとか、こんな大人にはなりたくな
いとか、それぞれの思いを出し合っていくうちに、それぞれの班で作りたい映画が見えてきます。さらにそれを台詞と書きからなる
脚本に仕上げます。これだけの作業を第1日目に終えなければなりません。それぞれがばらばらに思い描いていたことを、はっきり
とした形にして、班のみんなで共有するという作業は、苦しいけれど大変楽しいものでもあります。

子どもたちの考えていることを、監督が引き出していくんですが、聞いていて面白いです。「不良ってどんなもん」とか言う問いに「
不良は嫌いだ」とか、「不良と卑怯は違う!」とか議論をするんです。見ていた私がびっくりするくらいの熱のこもった議論が繰り広げ
られました。

Q: こどもたちは、大人が思いつかないような発想をするでしょうから、形にしていこうというのは、難しいでしょうね？

久我さん…そうですね。別の班では、将来の夢であるサッカー選手、パティシエ、科学者など、様々な登場人物が出てきて、いった
いそれをどうやって一つの脚本にまとめるのか、監督が頭を抱えている場面に出会いました。

Q: 映画づくりをしたことで、こどもたちに何か変化があったのでしょうか？



久我さん…二日目に撮影を開始したのですが、役者を演じる子、カメラ
を回す子、小道具や衣装を工夫する子、監督としてスタートの合図を出
す子、それぞれが役割分担して、時にはその役割を交換しあいながら、
撮影を進めます。高学年のこどもの中には、ちょっと大人っぽくて集団
から少し離れている子たちもいたのですか、その子たちもホラー映画用
のメイクをしてあげた途端、おおはしゃぎで、少しほっとしたりもしたので
した。

撮影にはトラブルもつきものです。三日目、昨日撮ったはずの素材が
映っていないことが判明した班がありました。誰かがカメラの録音ボタン
を押し忘れたのです。たちまち犯人探しが始まるのかと思いましたが、そんなことはありませんでした。もう三日目、時間がないと誰
かが言い出して、その班のみんな、団結して撮り直しに飛び出して行きました。

三日目の午後、それぞれ約5～10分くらいのDVDが焼き上がり、体育館に全員集合して上映会をしました。一斉メールが回ったら
しく。その頃にはこどもたちの保護者の皆さんもたくさん会場に集合してくれました。映画は全員で作るものです、スクリーンに映る

子もいれば、裏方で活躍する子もいる、誰かが一人でもいなければ、この作品は誕生していなかったはず、そんなことを話して、みんなが自分の作品、他の班が作った作品を見る、おそらくは貴重な経験になったのではないのでしょうか。

Q: 今後もプロジェクトは続けていかれるのですか？

久我さん…続けたいと思っています。豊間小学校は、津波の被害が非常に大きかった地域です。ほとんどの子どもたちが、依然として借り上げ住宅や避難先の家から通ってきています。そんな子どもたちが、夢を見る、20年先を考えるきっかけになってくれればなあというのが、今の私の願いです。

子どもたちは海辺の町に暮らしていて、東京のように情報があふれているわけではないところで育っています。閉塞感があるなかで、映画づくりをして、「こんな仕事もあるんだ!」とか、「こんな大人もいるんだ!」と感じているようです。

実際、「この仕事に就くには、どうすればよいのか?」と尋ねられもしました。いろいろな可能性が世界に広がっていることを知ってもらえたらと思います。



特集

映画祭をめぐる～世界の映画祭を知ろう～

結構回数を重ねているこのコーナー。今回はかなりユニークな映画祭を取り上げます。

爆音映画祭(公式HPより)

2008年にスタートした爆音映画祭は、2004年5月から断続的にオールナイトおよびレイト開催されてきた「爆音上映企画」を拡大し、映画だけでなくライブ演奏や、映画と音を巡る講演などさまざまな角度から映画と音を見ていく、聴いていく催しである。爆音上映とは、通常の映画用の音響セッティングではなく、音楽ライブ用の音響セッティングをフルに使い、ボリュームも限界まで上げ大音響の中で映画を見・聴く試みです。一般劇場上映では聴くことの出来ない迫力と、その爆音によって視覚までもが変容して映画そのものも違って見えるトリップ感覚、そしてまた、大音響でなければ聞こえてこない幽かな音を聴くという、大胆かつ繊細な上映をおこなっています。

「爆音」とは言っても音を大きくするだけではなく、その映画にとって最適な音とは何か、その音があることによって映画が違って見えてくるそれぞれの映画における音の核心はどこにあるのか? そんな映画におけるベストな音の探求こそ、爆音上映の醍醐味です。映画にとっての最良の音、最適な音が爆音映画祭にはあります。その大音響の中で、かつて見たことのある映画がまったく新しい映画として蘇ってくる、いわば〈映画の再生〉の瞬間に立ち会える喜びを、多くの人と分かち合いたいと考えます。映画の本質である映像と音を効果的に活かした作品を幅広く選択し、観客の皆さんとともに考える場として、世界中を見渡しても他に例を見ない映画祭といってもよいでしょう。

星空の映画祭(公式hpより)

ハヶ岳の麓、長野県諏訪郡原村。

ここには夏の間だけ、星空のもとに開館する映画館があります。

「星空の映画祭」は夏休みに長野県・原村の高原で野外で楽しむダイナミックかつロマンチックな映画祭。会場のハケ岳自然文化園・野外ステージには35mmフィルムの映写機を完備。大自然に囲まれた「野外映画館」としては日本で一番標高の高い場所にあり、真夏の夜にだけ開催される。

長野県諏訪郡原村。この地で夏の間だけ星空のもと開館する映画館がありました。「星空の映画祭」は2006年まで24年間続きましたが、DVDの普及や複合映画施設の台頭により、映画を観賞する環境は大きく変化し、いくつかの個人経営映画館は大打撃を受け、閉館に追い込まれました。星空の映画祭もまたそのひとつでした。しかし、「映画には人間を、地域を元気にさせる力がある！そしていまこそあの野外ステージで映画が観たい！」という想いから「星空の映画祭」を復活すべく企画を立ち上げ、ボランティアスタッフの運営により2010年の夏、再開することとなった。



思い出の映画

一思い出は、名画とともにいつまでもー。

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介します。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵な名画の数々をエピソードとともにお寄せ下さい！！

映画の思い出

(平 重忠)

「思い出に残る映画」というテーマをいただいて「どんな映画が思い出になっているだろう」と思いを巡らせてみました。けれど、これという一つの作品は思い出せませんでした。私は先天盲なので、ブラウン管であれ、スクリーンであれ、動画を観た記憶がありません。ただ、その内容やストーリーに惹かれて映画館に行ったことは何度かありました。

このような私ですので、映画館と映画にまつわる思い出という内容で書かせていただきたいと思います。

映画として記憶に残っているのは、テレビ放映された「ビルマの竊琴」です。小学生の低学年だったでしょうか。日曜日に父親が合わせたチャンネルで、いきなり戦闘シーンが耳に入ってきました。毎週何曜日だったかの夜にやっていた「コンバット」のようなものと耳を傾けていると、戦闘は終わり、誰かが街を歩きながら誰かに静かに一言二言話しかけている声が聞こえてきました。「今どうなってんの」と父に聞くと、托鉢してる、と言います。たぶん、「托鉢ってなに」、とも聞いたでしょう。

こうして、日本語のセリフと、イギリス兵の英語が飛び交う映画を、さすがに字幕までは聞けませんでした。自分が知りたいたった「どうなってんの」と問いを発しながら最後まで観ていました。そして、男声合唱団の声で流れる「埴生の宿」のメロディーは、子供にもせつなさの伝わる印象的な作品でした。

私は盲学校で学びました。同級生たちも当然に盲児です。夏休み前に、毎年のように彼らの間で交わされる話題が「東映漫画祭り」でした。残念ながら私はこの話題に参加できませんでした。彼らも全盲、私も全盲、視力の違いではなく、映画館に足を運んだか運ばなかったかの違いです。私が、ザ・ピーナッツの「モスラー、ヤ、モスラー」の歌を知ったのは友人たちの歌声からでした。ピーナッツの歌声で聴いたのはテレビ放映だったように思います。

青年期になると、映画館といえばデートです。このシチュエーションは、なんとしても実現せねば一人前の証明書がもらえないような気がしました。平日の昼間、観客が少なそうな時間帯を選んで劇場に入りました。この時間帯を選んだのは、デートだからではありません。シティ・ライツ用語でいう「コソコソガイド」のためです。作品名は忘れましたが、「今どうなってんの」の問いを当時の彼女に連発していました。

すると近くで「あのう、お客様、静かにご覧ください。」の声が聞こえてきました。なぜ会話をしているのかを説明しましたが理解は得られませんでした。退去はさせられませんでしたので、コソコソガイドは続けました。多少、「今どうなってんの」の声が大きくなったのは、若気のいたりででしょうか。

私の映画とのかかわりはこんな風に、細々と続き、話題を呼んだ映画の時だけ、数年に一回劇場に足を運ぶかどうかという程度で過ぎてゆき、子育て中には、自分が漫画祭りに行けなくて寂しかったので、子供向け作品を鑑賞に行く程度でした。

そんな私が、毎週のように映画館に足を運び、それもストーリーだけでなく、映像をも楽しめるようになるとは、本当に幸運な人生です。このような環境が全国に広がっていくことを願っています。



お知らせ

■新規会員のご紹介

(2013年6月30日までにご入会いただいた方々です。)

[正会員] ・中川聖一(東京都北区在住) ・坂田美子(東京都八王子市在住)

・佐藤和子(東京都台東区在住) ・竹内奈津子(東京都大田区在住)

・新井育秀(埼玉県ふじみ野市在住)



編集後記

編集スタッフ、校正係や音訳スタッフ也大募集！

希望の方は会報編集課まで！

(会報編集課 ノンちゃん)

これを書いているのは実は6月29日。第6回シティ・ライツ映画祭の前日です。編集長、原稿が遅れてごめんなさい。と、お詫びをしてから…。記事の方では今年の映画祭の上映作品に関わった方々からお寄せいただいた原稿が並んでいます。テーマでもあった「一歩」に関連付けてガイドづくり初体験の方にもお願いして書いていただいたのですが、やはり、人間、最初の一歩というのはドキドキするもの。そして、楽しいものということがひしひしと伝わってきたと思います。残念ながら第6回の映画祭にはいらっしやれなかった会員の皆様も、きっとあるはずの第7階の映画祭には参加したくなること請け合いではないかしら？ だといいなあ…。

映画祭はシティ・ライツみんなのもの。そして、シティ・ライツもちろんみんなのものです。設立から10年以上が経っているいろいろなところも多いですが、もっともっと素敵で新しいシティ・ライツを目指して行けたらいいなあと思う今日この頃です。

(会報編集課 吉川)

皆さんこんにちは。おっとおっと、ここで読むのやめるな、最後まで読め。

みなさんこんにちは。もうすぐ夏ですね。これが届くころはすでに夏か。最近、名曲喫茶というものによく行っています。名曲喫茶とは、すばらしいオーディオ機器を備えていて、クラシックの名盤をクオリティの高い音質で聞くことのできる、喫茶店のことです。クラシックファンとしては、非常にありがたい存在。先日、2時間ほどすばらしいレコード鑑賞をしてきました。曲はスメタナのわが祖国。ラファエル・クーベリック指揮です。自宅のしょぼいプレーヤーではありえない圧倒的な情報量と音質を堪能してきました。

そうそう、6月15日から自分が大好きウディアレンの新作が公開されます。この人得意の恋愛喜劇。ことしも楽しい映画ライフが送れそうだ、ウフフ。

お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。

皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は10月10日。投稿される方は、9月第2土曜日までをお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2013年冬7月10日発行 編集：吉川俊平、斉藤恵子、石坂春香

発行者：バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ

事務局：〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995

E-mail mail@citylights01.org URL <http://www.citylights01.org>

